

おいでん・さんそんSHOW

5月号
2017.5.30発行

特集 | 足助地区に精神障がい者福祉施設を開設 誰もが住み慣れた地域で 輝けるように



畦道のパンフレットを持つ代表の今枝美恵子さん(右)と副代表の鈴木悠太さん(左)

まず、精神障がいについて聞いてみると、代表的な病気である統合失調症の発症率は100人に1人。うつ病は4人に1人くらいと鈴木さん。精神障がいは、誰もが発症する可能性のある身近な病気だと教えてくれました。発症してすぐは、幻聴や妄想が顕著なことがあるそうですが、適切な治療をすれば症状を

今枝さんは、認知症の祖母を介護していたヘルパーに憧れて日本福祉大学に進学。卒業後の

実は身近な精神障がい

148名。足助・旭・下山・稲武・小原地区で精神障害者保健福祉手帳を所持する人の数です。精神科医療機関、就労支援施設は都市部にしかなく、当事者と家族は不便を余儀なくされています。

そんな中、代表の今枝美恵子さんと副代表の鈴木悠太さんが、誰もが住み慣れた地域で輝けるようにを理念に掲げ、5月1日に足助地区新盛町にデイサービス型地域活動支援センター「畦道(あぜみち)」を開所。人手が足りない山村部の仕事を担ってもらうことで、精神障がいの方の居場所づくりにつながりたいという2人の想いが形になりました。刈谷市、碧南市でそれぞれ働いていた鈴木さんと今枝さんがなぜ豊田市に畦道を開所することになったのか。経緯とこれからを伺いました。

行政に依存しつつも「自立」に向かっていけると言えないだろうか。

理屈抜きに小躍りするほど嬉しい。都市と山村が共存する豊田市だからこそ発想できるセンターの取組みと胸を張っては来たが、これでいいのだろうか。自問することも少なくなかったからである。

五月晴れのような気持ちのいい新年度の幕開けとなったが、

喜んでばかりはいられない。重要なのは、取組みが先進的であることではなく、取組みによって地域が、あるべき幸せのカタチにどれだけ近づけたかである。気を引き締めて、今はない道を切り開いて行こうと思う。

病院の近くに引越す現実

足助地区出身の鈴木さんは、高校で進路を選ぶ際、「これから高齢化社会だ」と聞いて、将来実家に戻っても職に困らないだろうと日本福祉大学に進学しました。在学中の精神科病院でのアルバイトで、患者さんに寄り添うソーシャルワーカーの仕事に憧れ、高齢者福祉から精神障がいの分野に進みます。

卒業後に勤務した刈谷病院は西三河に住む精神障がい者の、緊急受入れ先の1つでした。ある時、稲武地区から緊急搬送され入院した方が、退院後家族と一緒に病院の近くに引越して来ました。以前から、豊田市中心部に通える場所がないと懸念していた鈴木さんは、その現実を目の当たりにして「精神障がいの方への福祉サービスがないために住み慣れた家、地域を離れなければならないのは、本当に残念」と、事業所を作ることを考え始めます。

通所して来ない人のためにも何かしたい

148名。足助・旭・下山・稲武・小原地区で精神障害者保健福祉手帳を所持する人の数です。精神科医療機関、就労支援施設は都市部にしかなく、当事者と家族は不便を余儀なくされています。

そんな中、代表の今枝美恵子さんと副代表の鈴木悠太さんが、誰もが住み慣れた地域で輝けるようにを理念に掲げ、5月1日に足助地区新盛町にデイサービス型地域活動支援センター「畦道(あぜみち)」を開所。人手が足りない山村部の仕事を担ってもらうことで、精神障がいの方の居場所づくりにつながりたいという2人の想いが形になりました。刈谷市、碧南市でそれぞれ働いていた鈴木さんと今枝さんがなぜ豊田市に畦道を開所することになったのか。経緯とこれからを伺いました。

まず、精神障がいについて聞いてみると、代表的な病気である統合失調症の発症率は100人に1人。うつ病は4人に1人くらいと鈴木さん。精神障がいは、誰もが発症する可能性のある身近な病気だと教えてくれました。発症してすぐは、幻聴や妄想が顕著なことがあるそうですが、適切な治療をすれば症状を

行政に依存しつつも「自立」に向かっていけると言えないだろうか。

理屈抜きに小躍りするほど嬉しい。都市と山村が共存する豊田市だからこそ発想できるセンターの取組みと胸を張っては来たが、これでいいのだろうか。自問することも少なくなかったからである。

五月晴れのような気持ちのいい新年度の幕開けとなったが、

喜んでばかりはいられない。重要なのは、取組みが先進的であることではなく、取組みによって地域が、あるべき幸せのカタチにどれだけ近づけたかである。気を引き締めて、今はない道を切り開いて行こうと思う。

病院の近くに引越す現実

足助地区出身の鈴木さんは、高校で進路を選ぶ際、「これから高齢化社会だ」と聞いて、将来実家に戻っても職に困らないだろうと日本福祉大学に進学しました。在学中の精神科病院でのアルバイトで、患者さんに寄り添うソーシャルワーカーの仕事に憧れ、高齢者福祉から精神障がいの分野に進みます。

卒業後に勤務した刈谷病院は西三河に住む精神障がい者の、緊急受入れ先の1つでした。ある時、稲武地区から緊急搬送され入院した方が、退院後家族と一緒に病院の近くに引越して来ました。以前から、豊田市中心部に通える場所がないと懸念していた鈴木さんは、その現実を目の当たりにして「精神障がいの方への福祉サービスがないために住み慣れた家、地域を離れなければならないのは、本当に残念」と、事業所を作ることを考え始めます。

通所して来ない人のためにも何かしたい

今枝さんは、認知症の祖母を介護していたヘルパーに憧れて日本福祉大学に進学。卒業後の

4月25日に総務省が、「これらの移住・交流施策のあり方に関する検討会」(座長・小田切徳美 明治大学教授)の中間報告を公表した。報告では、『これか

らの移住・交流施策を展開していくためには、長期的な「定住人口」や短期的な「交流人口」でもない、地域の人々と多様に関わる「関係人口」と地域をつなぐ仕

組みを整えるため、地域の中に置いてコーディネート機能・プロデュース機能を発揮できる自立した中間支援機能が不可欠である。』としている。

行政に依存しつつも「自立」に向かっていけると言えないだろうか。

理屈抜きに小躍りするほど嬉しい。都市と山村が共存する豊田市だからこそ発想できるセンターの取組みと胸を張っては来たが、これでいいのだろうか。自問することも少なくなかったからである。

五月晴れのような気持ちのいい新年度の幕開けとなったが、

喜んでばかりはいられない。重要なのは、取組みが先進的であることではなく、取組みによって地域が、あるべき幸せのカタチにどれだけ近づけたかである。気を引き締めて、今はない道を切り開いて行こうと思う。

病院の近くに引越す現実

足助地区出身の鈴木さんは、高校で進路を選ぶ際、「これから高齢化社会だ」と聞いて、将来実家に戻っても職に困らないだろうと日本福祉大学に進学しました。在学中の精神科病院でのアルバイトで、患者さんに寄り添うソーシャルワーカーの仕事に憧れ、高齢者福祉から精神障がいの分野に進みます。

卒業後に勤務した刈谷病院は西三河に住む精神障がい者の、緊急受入れ先の1つでした。ある時、稲武地区から緊急搬送され入院した方が、退院後家族と一緒に病院の近くに引越して来ました。以前から、豊田市中心部に通える場所がないと懸念していた鈴木さんは、その現実を目の当たりにして「精神障がいの方への福祉サービスがないために住み慣れた家、地域を離れなければならないのは、本当に残念」と、事業所を作ることを考え始めます。

通所して来ない人のためにも何かしたい

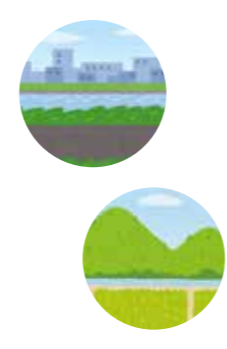
今枝さんは、認知症の祖母を介護していたヘルパーに憧れて日本福祉大学に進学。卒業後の

センター長のミライのフツツに 向かって!



2017 第2回 一足お先に「中間支援」

コントロールしながら、その人らしく働き、暮らすことが可能だそう。



イベント情報

吉田俊道氏講演会～生ごみ・雑草で活き活き土づくり～菌ちゃん先生の土づくり・野菜づくり・体づくり講座

●内容:土ごと発酵させる「菌ちゃん農法」の普及に努める吉田俊道さん。菌ちゃん野菜を食べると体温が上がった、風邪を引きにくくなったという子どもが続出しているそう。大地とつながる食を通して心と身体は健康になり、体験を通して不自然な価値観や感覚は少しずつ本来の姿に戻るのだと吉田さんは言います。初心者にもでき、病害虫の来ない美味しい元気野菜は多くの人に絶賛されています。全国を飛び回る吉田俊道さんの話を聞けるラッキーな機会です。ぜひ、お時間見つけてお越しください。

●日時:2017年6月22日(木) 10:00~14:00 ●スケジュール:10:00~12:30講演会12:30~14:00お昼ご飯を食べながら、懇親会(自由参加) ●参加費:1,000円 ●お弁当注文:1,000円(コレカラ弁当) ※注文締切は6月15日(木) ●定員:50名 ●講師プロフィール:NPO法人大地といのちの会。1959年長崎生まれ。長崎県環境アドバイザー。九州大学農学部大学院卒業後、長崎県の農業普及員に。1996年県庁を辞め有機農家を始める。1999年に「ながさき県北『地球村』」を発足、2003年より「NPO 法人・大地といのちの会」と改め、九州を拠点に生ゴミリサイクル元気野菜作りと元気人間作りの旋風を巻き起こしている。野菜作り、土づくりを通して子どもたちの免疫力を上げる活動も行う。著書「いのち輝く元気野菜のひみつ」「生ごみ先生のおいしい食育」「まるごといただきます」など。

●申込・問合せ:おいでん・さんそんセンター食と農専門部会(小黑) tel:0565-62-0610 mail:sanson-center@city.toyota.aichi.jp ●申込み必要事項:メールの際は件名を『吉田俊道氏講演会』としてください。お名前・連絡先(携帯TEL・mail)・懇親会の出欠・弁当注文の有無 **その他の情報は、センターHPをチェック!**



農家のレシピ



information
「ター」で足助地区に住み専業農家として4年の徳八農園さん。ご夫婦2人で作った野菜は、足助のバレットなどで購入することができます。

材料
グリーンピース だし汁 砂糖
しょうゆ みりん
材料の分量はそれぞれご家庭のお好みで調整してください

グリーンピースの卵とじ

- 作り方
1. グリーンピースの皮をむいて実を取り出し、サッと水で流します
 2. だし汁をお鍋に沸かし、沸いたらグリーンピースと調味料を入れ煮ます
 3. グリーンピースが柔らかくなったら(5分くらい)溶き卵を流し入れ、卵とじにしたら完成です

今回は、初美さん(左)が幼い頃、おばあさんと一緒に皮むきした思い出のあるグリーンピースのレシピ。卵を入れた後の混ぜ具合で出来上がりが変わるので、色々試してお気に入りを見つけてくださいとのことです。

REPORT

遊休水田を桑畑に再生

～NPOマルベリークラブ～

都市と山村のつながりが地域を蘇らせる



(上)(下)桑の苗を植栽の様子

4/9(日)、耕作放棄地で桑を栽培し、桑茶、パウダーに加工販売する六次産業化に取り組むNPO法人マルベリークラブ中部(名古屋市)が、センターのマッチングにより旭地区押井町の遊休水田で桑の苗の植栽を行いました。

山村の活性化に取り組む豊田高専の学生10名も応援に駆けつけ、総勢30名

が、雨上がりでぬかるむ1反の水田に畝を立て、悪戦苦闘しながらも350本の苗を1日ばかりで植え切りました。NPO法人代表理事の藤澤秀機さんは、「健康ブームを背景に桑茶、パウダーの売れ行きは順調、地域に馴染みの深い桑栽培は、農地活用の切り札になる。地域の文化として次世代に伝えたい」と意欲を見せています。

普段は、ほとんど人のいない山あい、人々の歓声がこだまし、都市と山村のつながりが、地域を蘇らせることに確信を持って一日となりました。(鈴木辰吉)



REPORT

トヨタ自動車労働組合開耕式



75名が参加し、1200㎡の水田に手植え

5/21(日)、トヨタ自動車労働組合の2017農業体験「田植え」が、足助地区新盛町で開催されました。晴天の下、組合員と家族75名が参加、新盛里山耕実行委員会(会長鈴木邦夫さん)のベテラン農家の丁寧な指導で1200㎡の水田に手植えしました。前市長鈴木公平さんは、スタートの年から毎回参加、きちんと決められた手順で育てれば土と自然が作物を育ててくれると「土の力の大きさ」について挨拶されました。耕作放棄地の開墾から始まったトヨタ労組の取り組み、トッランナーとして未永く続いて



一列になって手植えの様子



REPORT

おおだ暮らしの参観日開催



地域と空き家、両方を見学

4/23(日)、おおだ暮らしの参観日が開催されました。太田町の自然や地域の方とふれ合う田舎暮らしの体験会です。

地域の方から、太田町の地域の説明や暮らし振りの紹介があった後、1ターンで太田町に移住された方にも参加頂き、他所からこの地域に来て良かった事や苦労した事など、よそ者目線を見た太田町の暮らしの紹介もありました。



(左)見学した大屋根のある家

田舎では年末だけで無く、機会があると行われる餅つきですが、当日も土手でよもぎ摘みをして、草餅づくりを体験しました。

きな粉とあんこを点けて頂きましたが、つくたての餅の美味しさは格別です。気持ちの良い青空の下、みんなで一緒にわいわいと楽しい時間を過ごすことができました。

食後は、オフグリッド【注】の手づくりの家と、空き家情報バンクに登録予定の空き家を見て回りました。エネルギー自給のできるオフグリッドハウスはロフトがあったり、室内にブランコがあったりと楽しめる造りです。もう一軒のお宅は田舎家らしい部屋数の多い家で、日当たりの良い気持ちの良い家でした。ご興味のある方は、市ホームページ(www.city.toyota.aichi.jp)の空き家情報バンクのインターネットページをご覧ください。旭支所(TEL:0565-68-2211)までご連絡下さい。(西田又紀二)【注】電力会社の送電網と、



(中)(右)よもぎ摘みと餅つきの様子



1,2.国道153号線沿いにある睦道の建物 3,4.林さん、鈴木さん、関係者の皆さんで内装リフォームをした 5.開所式の最後に、鈴木辰吉センター長が挨拶し、2人の激励をした

進路に迷っていた時、実習先の精神科病院で患者さんに、「やりたいことをやってみたらいい」と背中を押されたことがきっかけで、碧南市の精神障がい者の作業所で働き始めます。
内職を一緒にしながら、利用者の悩みや相談を聞いていた今枝さん。勤続4年が経つ頃には、作業所のある碧南市、隣の高浜市の精神障がいの方たちの状況がわかるようになってきました。集団生活に馴染めなくて作業所に通えない、親御さんを亡くして住まいに困っている。そんな当事者の声に心える福祉サ
ビスを充実させていく必要性を感じ始めます。そこで、上司に提案してみたのですが、返ってきたのは「事業の拡大は考えていない」という答え。「方向性の違いを感じましたが、社員は上司と私の二人だけ。それ以上の展開が望めないことに閉塞感を感じました」と今枝さんは言います。
研修会で再会し、意気投合
大学の同期だった二人は、お互いにもやもやを感じていたタイミングで再会を果たします。愛知県内の精神保健福祉士が参加する研修会で、実行委員の飲

み会があり、たまたま隣に座っていた美恵子さんに、鈴木さんが山村部での事業所開設についての相談を持ち掛けました。「地域に入り込んでやっていきたい」と聞いて、面白そうだと思いました。前年度の研修で鈴木さんの発表を聞いて、福祉と地域への熱意をすごく感じたので、一緒にやっていこうと決めました。「と美恵子さんは振り返ります。
事業所開設に向け、直線
その後、任意団体を立ち上げ、準備を始めた二人。仕事を続けながら、山村部で開講している豊森なりわい塾やミライの職業訓練校に参加したり、各地区の保健師さんに会ったり。山村部の精神障がい者を取り巻く環境の聞き取りや、地域とのつながりづくりを奔走しました。昨年の3月からは山村部の交流館で座談会、交流会すである事業所の見学を定期的に開催し、当事者と一緒になって事業所の姿を考えてきました。
地元にも理解を得て、開所
おいでん・さんそんセンターの仲介で、家主と地域住民の理解が得られ、新盛町で五平餅店を営んでいた旧店舗を事業所として借りられることになり、今年の4月には、「特定非営利活動法人みち」を立ち上げ運営体制

を整えました。5月1日の開所式には、市障がい福祉課など行政、関係団体など29名もの参加があり、鈴木さんは「多くの方に支えてもらい、すごくありがたい」と心境を述べています。
その人にあった仕事を
利用者には、新割り、農作業など、当初から考えていた地域の仕事に加え、室内でできるコーヒー豆の選別作業などをやってもらう予定だそう。「仕事に人を当てはめるんじゃないくて、利用者の方ひとりひとりに合った仕事をやってもらいたい。これから地域の方と交流するなかで、どんな小さな仕事でも見つけていきたい」と美恵子さん。
誰もがその人らしく働ける会社にしたい
たくさんのつながりの中で、睦道の設立を実現させたお二人。夢を叶えたと思いきや、すでに次の目標が定まっています。「山村部は広いので、この事業者に来るにも不便を感じる方がまだいる。拠点を増やして、例えば稲武だったらブルーベリー、下山だったら五平餅や菊の栽培など、地域の特性にあった作業をやっていかれたら」と鈴木さん。美恵子さんは、「利用者本人が、配偶者の方に収入があると、ここに通うのに利用料がかかりま

す。その負担感をなくしたいし、経営としても利用者の数＝事業収入となり続けるのは良くない。精神障がいの方以外でも、例えば子どもが小さいお母さん、高齢のおじいちゃんおばあちゃん、どんな人でも、好きな時に自分に合う仕事ができる場所にした。仕事のバリエーションを増やして、派遣会社のようにできたら」と意気込んでいます。
精神障がいだけでなく、誰かに支えてもらう境遇に、誰もがなり得るのではないのでしょうか。「どんな境遇になっても、誰もが自分らしく働ける」環境づくりのために前進し続ける2人は、地域に安心の連鎖を生み出しはじめていると感じます。(木浦幸加)

地元からの声
『睦道』が社会に求められる新しい施設として再生されたことを喜んでいきます。集落の一員として地域づくりに「役買っていただくことを期待しています。」
新盛自治会長 鈴木勝義さん